まえがき

ルーン文字学

ルーン文字を研究する学問がある。ルーン文字学(runology)である。ノルウェイのルーン文字学者の Carl J. S. Marstrander はこの学問を“ paleografi, lingvistikk, arkeologi og mytologi”（古文書学、言語学、考古学、神話学）とした。実際にはルーン文字学というのは歴史言語学であるのだが、ルーン碑文だけでは時代付けが困難なため、考古学、文献学といったものに支えられなければならなく、これらの理解が必要となる。ルーン文字学は歴史言語学である。これには多くのルーン文字学者が賛同するのだが、最近ではさらに多角的な研究がなされているのである。

今回はルーン文字があった状況に要点を置いてみました。いつもとは違う趣旨ですが、ルーン文字を使用したゲルマン人について取り上げることにしました。ルーン文字が発祥した時期、いわゆる民族移動以前のゲルマン人、そしてフサルクが確立したであろう民族移動期のゲルマン人に関する事を文献から構築するという作業を行いました。正直、ローマの文献や中世のサガ等の文献を資料として扱うことには反対意見もあろうかとは思いますが、意図して今回はその作業を行っていることをご理解いただけたら幸いです。そして今回は文献を調べることに少し重点を置いてみました。ことばの中に数世紀も隔てた過去の事実の片鱗が垣間見れる可能性を教えられたからであります。

正直、私の出来る事といえば「こんな説、こんな本がありますよ」「こんな学者先生がいますよ」というような紹介をすることしかできませんが、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

また、細心の注意は払ったつもりではありますが、間違い、理解し間違い等の可能性は十分にあります。わかり次第、随時サイトで訂正を載せていきます。また、ページの都合上、専門的な単語などを説明なしにそのままで表記しております。決して、いきって（死語）、いいかっこしているわけではありません。ご了承の程、お願い申し上げます。まぁ、ぶっちゃけ、おサボリですが。

URL は以下です。何かお気づきの点などございましたらそちらの方にご連絡の程、宜しくお願い致します。

http://www.runsten.info/
http://www.runsten.info/burrow （掲示板のある場所。でも、わからないことは大学生は大学の先生に聞いてね！そしてまずなにより「ルーン文字―大英博物館双書―失われた文字を読む／レイ・ページ著, 菅原 邦城訳」を読んでね！）

ルーン文字の発祥と移動期以前のゲルマン民族

最古級の碑文

一般的に共通ゲルマンルーン文字と称されるより古い時代の信頼の置ける碑文はおおよそ西暦 150 年 ～ 700 年頃のもので、スカンジナビア、ドイツ、イギリス、オランダ、ベルギー、フランス、スイス、ハンガリー、ボスニア、ルーマニア、ウクライナからの発見物がある。現在発見されている碑文は、ブラクテアートも含めて約 450 個(ブラクテアートは約 200 個(Ikonographischer Katalog では 105 個の型、182 個のルーン碑文のある個体))が共通ゲルマンルーン文字の碑文のある品物と認められる(Looijenga 2003 : 27)。スカンジナビアの碑文（ゴートの碑文はスカンジナビアの碑文に形状の特徴が似る）、大陸の碑文では特徴が異なる。これらは主として金属品に刻まれいるが、木製品、骨製品の有機物に刻まれたものも少ないながら発見されており、初期段階においては石碑に彫られた碑文は多くはない。

そして最古級のルーン碑文が記された言語は、特に北欧で伝統的にノルド祖語(Proto-Nordic、時として Proto-Norse、Primitive Norse、Proto-Scandinavian)との見解が普及している。しかしながら E. H. Antonsen は全て記録されていない言語からの再建である基語言語のノルマン基語という名称を記録されている言語であるものに冠することは不適切であるとしている。また共通ゲルマンルーン文字の碑文に明確にスカンジナビア諸語の特徴が見られるのは約西暦 500 年以降で、最古級のこれらの碑文はスカンジナビアの地域に限った特徴を示す言語でもないとして、地理的な「北西ゲルマン語」との呼称を普及させようと試みている。しかしながらこの呼称はスカンジナビアでは一般的ではない。

ルーン文字のマトリクス

ルーン文字のマトリクスと発祥時期については数多く議論がなされ、未だに決着がついていない。ラテン文字説(Wimmer 1874, [2]1887、 Pedersen 1923、Agrell 1938、Askeberg 1944)ギリシャ文字説(Bugge 1905-1913、v. Friesen 1906、Kabell 1967)、北イタリア文字説(Marstrander 1928、Hammerström 1930、Altheim and Trautmann 1939、Krause 1966、esp. 6-7、Markey 1998)の３つである。ラテン文字説のデンマークのルーン文字学者 E. Moltke (1976: 32-61, [2]1985: 38-79) は古代の文字を比較し由来を導きだそうとした。発祥の時期と場所については、ローマ帝国と良好な関係で文字の借入がなされたとし、ローマ帝国とゲルマン民族の関係悪化以前の西暦 100 ～ 紀元前 150年頃、より安全に 0±100(50)年とし、ラインラント（ライン河以西の地方）から持ち帰られたラテン文字をデンマークでルーン文字として案出したとした。

Phoenician c. 850 BC

The Mesa alphabet + variants

name	sound value
alf	breathed sound
bet	b
geml/gaml	g
delt	d
he	h
uau	w
zajin	z
(c)heth	kh
thet	th
jod	j
kaf	k
lambd	l
mem	m
nun	n
semk/samekh	s
hayin	guttural sound
pe	p
sade	s
qof	q
rosh/resh	r
shin	sj
tau	t

Greek c. 660 BC

The Samos alphabet (Eastern Greek)

name	sound value
alpha	a
beta	b
gamma	g
delta	d
epsilon	e
uau	w
zeta	z
eta	e
theta	th
iota	i
kappa	k
lambda	l
my	m
ny	n
[ksi	ks]
omikron	o
pi	p
mangler	
koppa	q
ro	r
sigma	s
tau	t
ypsilon	y
phi	f
khi	kh*
psi	ps
omega	o
* Western Greek	ks

Etruscan c. 800 BC

Marsiliana and others

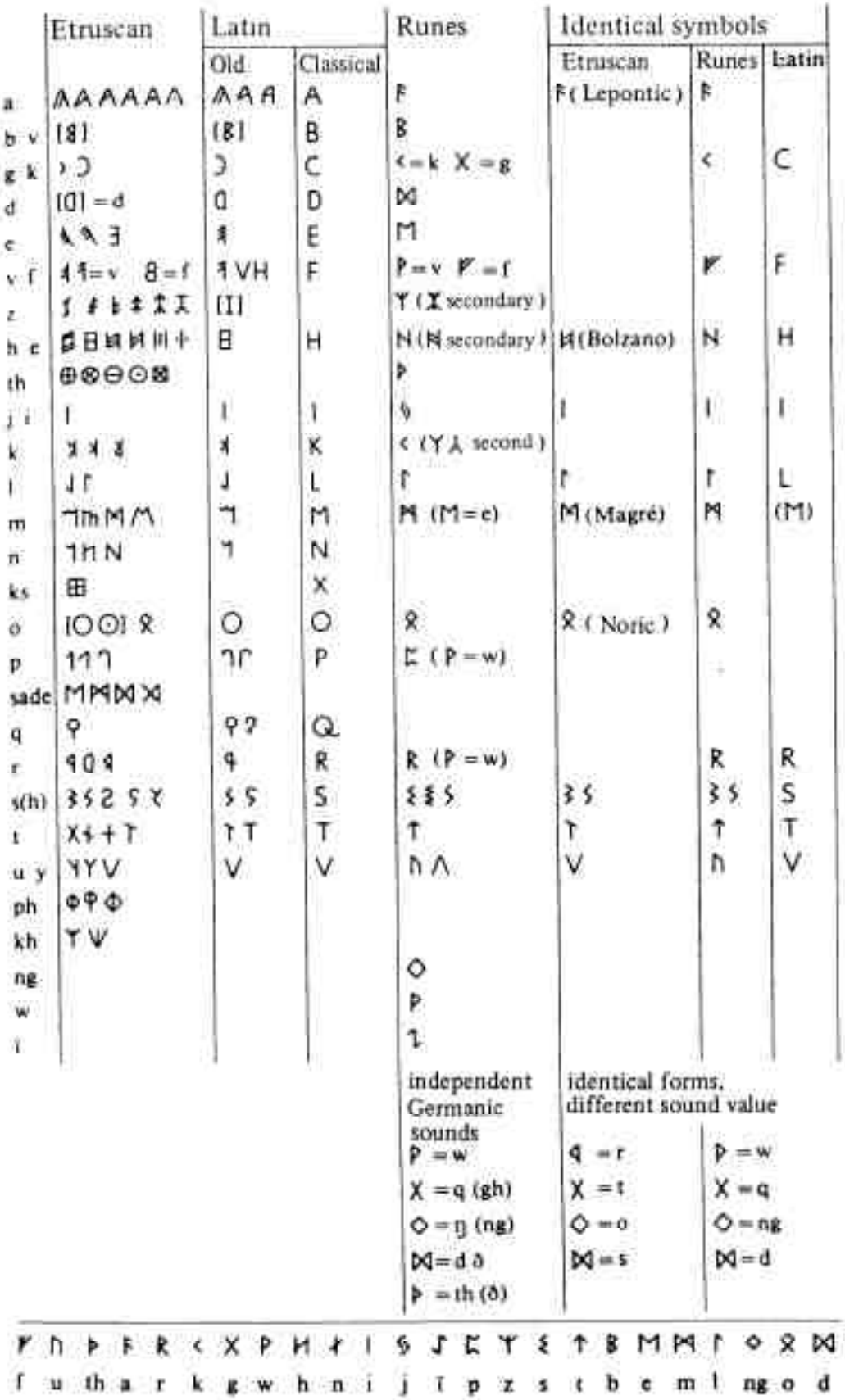
name (and sound value)	
a	
be	
ke ka	*
de	
e	
ve	
[ks]	
[h]	
[th]	
i	
ka	
el	
me	*
ne	*
[s]	
o	
pe	
[s]	
[q]	
re	*
se	
te	
[u]	
[s	X]
[ph]	
[kh]	

later additions:

[f]	
[s]	

* youngest variants (after 400 BC)

Runes and Their Origin Denmark and Elsewhere ERIK MOLTKE P46



Runes and Their Origin Denmark and Elsewhere ERIK MOLTKE P55

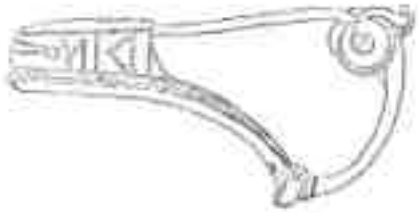
ルーン文字の発祥時期

発祥の時期と深く関わるのは最古の発見物である。ラテン文字説を提唱した Ludvig Wimmer は、1874 年の Runeskriftens oprindelse og udvikling i Norden にライン河沿岸に住むローマ人の事例を参考にしてルーン文字が出来上がったとしている。これに先行するものとして 1822 年からの Jakob Bredsdorff の Om Runeskriftens Oprindelse と 1864 年からの Adolf Kirchhoff の Das gotische runenalphabet がある。Wimmer の時代には４世紀以前のルーン碑文は発見されていなかった。そしてその碑文が決まり文句だったのでこれより 100 年はその起源が遡れるとし、起源は３世紀初期で、２世紀末期より以前ではないとした。またイギリスのルーン文字学者の R. I. Page は以下のように述べている。

[Our earliest inscriptions in runes date perhaps from the late second century AD. Already they show mastery of the script and some variety of technique recording it. They are on metal as well as on wood. So mature are they that probably a century or so of runic history lies behind them.]（邦題は【ルーン文字―大英博物館双書―失われた文字を読む／レイ・ページ著, 菅原 邦城訳】）

さらに E. Moltke は[- then the date of our earliest inscription has to be moved back by another 150 years, to c. AD 50.](1985: 65)と述べている。

さてここで疑問が湧いてこないだろうか。この「１世紀遡る」である。何を根拠に１世紀遡れるのかとの説明が皆無なのである。文字の発達の比較研究からそういわれているのか、はたまた伝統的に最古の碑文より１世紀遡るという作業が自動的に行われているだけなのだろうか、全くもって判断がつかないのである。実際、上記 Wimmer は当時最古の４世紀の碑文から１世紀を遡って３世紀を起源としたが、実際には約西暦 160 年の Vimose 沼の櫛がある（250 年ごろに割り当てる説もある）。そろそろ＜最古の碑文から１世紀その起源は遡る＞というフレーズをやめてもいいのではなかろうかと思うのである。現時点では記述の Vimose 沼の櫛の碑文が信頼の置けるルーン碑文として考古学上最古とされている(cf. Illkær 1996[a]:68,73)。しかし未解決なものでは西暦 50 年（1 – 25 年の説もある）の北ドイツの Meldorf フィブラがある。



Meldorf フィブラ

これはルーン文字のようにも見えるのであるが、恐らくラテン文字の碑文であろうとされている。ラテン文字は習慣的に右から左にはかかれないのであるが、Henrik Williams(2001) は Bengt Odenstedt(1983)の説を支持して Idin ← = I din と読み取り、ラテン語で「Ida へ」である。しかしながら Klaus Düwel は = hiwi と取り、ラテン文字ではなく、配偶者を意味する租ルーン文字とした。もしこれがルーン文字であるならば、これが最古となるのである。これは輸入品ではなく出土地のものである。ラテン文字であろうが、ルーン文字であろうが問題はそこではない。この時代に既に物品に文字を記すという行為が行われているということが重要なのである。

西暦２世紀～４世紀の最古級のルーン碑文はデンマーク、スウェーデン、ノルウェイ、北部ドイツ、ポーランド、ロシア、ルーマニアのものである。５世紀からのものはオランダ、イギリス、中央と南部ドイツにある。スカンジナビア、大陸の碑文は 700 年ごろまで続き、フリジア、追加と変更が行われたイギリスでは５世紀からのものがある。大陸では共通ゲルマンルーン文字は発見物から、２世紀 ～ 700 年ごろまで使われたとされている。これはキリスト教に改宗するまでの時代に一致し、歴史学上はメロビング期である。

共通ルーン文字を用いたのはゲルマン民族である。彼らは近隣の文明国家で使用されていた文字を参考にして、至る所に落ちていた木片を手に取り、腰にぶら下がっていたナイフで文字を刻んだ。木目と混ざって見難くなるため水平線と曲線が避けられ、角ばった文字が出来上がったのである。

前々作の 2001 年版でも書いているのですが頻繁に出てくるこのフレーズは 20 世紀に置いてきてはいかがでしょうか。なぜ口伝えのゲルマン人が日常の記憶のため文字を考案、気軽に使用する必要があるのかといささか疑問に感じるのである。最古級の碑文は沼や湖の奉納品であったり、副葬品であったりと非日常の高価な物品上にあり、碑文も決まり文句や非日常のものである。

Looijenga(2003: 110)はルーン文字が当初から日常的なものではなく、木片に刻むために角ばっているのでもないとしている。それは古代ギリシャ文字、エトルリア文字、古典ラテン文字、ラエティアの文字、ヴェネチアの文字のように古代の文字が角ばっていることに理由付けられ、これらは木片に限って刻まれた文字でもなく、あらゆる種の材料に使用されたと述べ、木目によるルーン文字の角ばった形状の特質は空論としている。

出土場所

最古級の碑文は金属製品等の高価な携行できる物品に残されている。Thorsberg（エルベ河下流とライン河）の遺物、Dahmsdorf（ドイツ・ブランデンブルグ近郊の火葬の墓）の槍の穂、Kowel（ウクライナ・Volhynia。発見場所は野原）の槍の穂、Rozwadów（ポーランド。火葬の墓）の槍の穂が有名である。残念なことに Dahmsdorf の槍の穂、Kowel の槍の穂は第二次大戦で消失し、Rozwadów の槍の穂も現存しない。

Kowel 槍の穂

ranja「道筋を決めるもの」
(Dahmsdorf 槍の穂。ドイツ・ブランデンブルグ。AD250 年)
tilarids「ゴールを追うもの」
(Kowel 槍の穂。ウクライナ・Volhynia。AD250 年)
. . . krlus 不明
(Rozwadów 槍の穂。ポーランド。西暦３世紀)
owlþuþewaz niwajemariz「Wolþuþewaz、汚点のない名声の」
(Thorsberg 1 青銅製の剣のこじり。ドイツ・シュレスヴィヒホルスタイン。AD200 年)
aisgz h「Aisigaz もしくは Aisigiz、霰(?)」
(Thorsberg 2 青銅製の楯の突起。ドイツ・シュレスヴィヒホルスタイン。AD200 年)

Thorsberg 1 青銅製の剣のこじり

最古級のルーン碑文が残された物品は沼や湖の捧げ物、副葬品である。デンマークでは古くから行われていた沼の捧げ物は西暦 500 年頃まで続く。紀元前 100 年～西暦 500 年には全地域の大きな沼では捧げ物があった。Thorsberg、Nydam、Ejsbøl、Porskær、Illerup、ユトランド半島の Hedelisker、フューン島の Vimose、Kragehul などである。

北欧では副葬の習慣は紀元前 500 年 ～ 100 年の前ローマン鉄器時代では質素で、衣類に用いるバックルや留め金類である。この時代も沼や湖への捧げ物はあり、武器だけでな

く農具も発見されている。そしてこの後の時代に農業の再編成により富裕層が出現し、支配者階級の出現が覗われる。さらに支配者階級に仕える職業戦士の階層が現れる（ゲルマーニア）。紀元前 200 年 ～ 150 年頃、北部ドイツの平野やスカンジナビア南部、デンマークで豊かな副葬品が現れる。西暦１世紀の王侯級の墓にもその傾向が見られる。初世紀から数世紀の間に火葬と並んで土葬の習慣が現れ、特にユトランド半島、シェラン島、ポーランド北部、エルベ河上流でローマの杯などの副葬品が発見されおり、武器がないのが特徴である。武器がないのは老人や婦人の墓と思われ、武器や拍車の副葬品のある若い男性の墓は現役の戦士の墓と推測される。副葬品の中には輸入品も多くあり、この頃がローマ帝国との接触のはじまりとみなされる。西暦２世紀～３世紀初めになると、ローマの商人らはローマ帝国から離れた場所でゲルマン民族と交易を行い、ゲルマン民族の貴族層は高価な物品を手に入れるようになった。帝国周辺のゲルマン部族は通貨の価値を理解していたが、遠く離れた地域では物々交換で交易が行われた（ゲルマーニア）。より帝国に近いゲルマンの部族らが仲介取引を行い、さらに遠いバルト海やスカンジナビアに物品がもたらされた。

交易ではない物品の動きもあり、いわゆる戦利品である。これらは破壊され沼への捧げ物とされた。これらは公の儀式と思われ、神官、儀式を取り仕切った者かそうではないかは判らないが、奉納する時に戦利品にルーン文字を刻んだという推測がある。

ローマの武器が多く発見されているが、交易品か戦利品かは判らない。西暦３世紀～５世紀にかけて動乱期になり、再び武器は副葬品として現れ、沼や湖への奉納も増える。ゲルマーニアにも記されているようにゲルマン種族は鉄製品が豊かではなかった。ローマは武器輸出を禁じたが、恐らく武器を製作する鍛冶屋からゲルマン種族の地へ輸出されたであろう。

ローマ帝国とゲルマン民族の背景

ルーン文字が発祥したと思われる時期のゲルマン人の記録というものはもっぱらローマの文献に頼られる。その主たるものは古代ローマの歴史家タキトゥス（西暦 55 年～120 年？）の「ゲルマーニア」である。それら文献にはローマ帝国とゲルマン人との関係が描かれている。

ローマ帝国により近い地域に住むゲルマン人は交易だけでなく、軍事でも関係していた。西暦１世紀にはライン側とエルベ河との間、ドナウ河畔に住んでいた多くのゲルマン民族はローマ帝国の保護を受けていた。ライン河西岸のバターウィー族、カンネネファテス族、マッティアキー族は貢物を納める義務はなかったが、補助軍隊の兵を提供しなければいけなかった。ライン河の河口のバターウィー族と隣接した地に住むフリシイ族は兵力は提供しなかったが、貢物の義務があった（ゲルマーニア）。西暦 28 年にフリシイ族が隆起し、しばらくは自由を取り戻したが、西暦 47 年に再び征服され、57 年には２人の首領がローマの被護民としてローマ市民権を受けた。ケルスキー族は長らく独立のために戦っていたのだが、内紛のため結局はローマに従属することになる。ヘルムンドゥーリー族はローマ人のおかげでドナウ河の西岸に移住し、クラウディア街道に至るまでのローマの守備隊がい

ないラエティア属州の国境を守備しなければならなかった。彼らはローマに対して唯一忠実であり、属州の中に入り、ラエティア属州の首都で取引する許しを得ていた（ゲルマーニア）。

またその反対の動きもある。ゲルマン人最大の種族同盟は西暦１世紀にマルコマンニ種族の首領マロボドゥスによって作られた。マルコマンニ族はマイン河畔に住んでいたが、ローマ人を恐れて紀元前６年にケルト種族のボイイ族の一部が放棄したボヘミアに移り住んだ。その雄王マロボドゥスは青年時代をローマで学び、その知識を活用して軍隊を編成した。東ゲルマンに住んでいたスエウィー族の一部、ランゴバルド族、ルギイ族などが彼に味方し、実際にはマロボドゥスと戦ったことはなかったが、ローマ帝国にとって最大の脅威となったのである。この後、マロボドゥスはケルスキー族の首領アルミニウスとの戦の敗北後、ティベリウス皇帝に援助を求めたが、皇帝は彼をラヴェンナに幽閉した。マルコマンニ族はクァディー族出身のローマ被護民であると認めていたローマの手先であるウァンニウスを王とした。彼は 30 年統治したが、同族の者によって追われ、ローマ人によってパンノニアに流刑にされた。

そして西暦１世紀中葉にドナウ河畔にサルマタイ諸種族のイアジュゲス人やロクソラノイ人が現れ、ローマ帝国との幾たびの衝突後に同盟を結ぶ。しかし西暦１世紀末にはマルコマンニ族、クアディー族、スエウィー人の一部、それにサルマタイ人が連合して、被護民としての隷属をふりきり、ローマに兵士を提供することを拒否した。彼らはドミティアヌス皇帝を破りパンノニアに侵入したが、後に敗北し、再びローマの被護民となる。帝国は彼らに王を押し付けたが、西暦 160 年代に彼らはそれに隆起し、これが帝国にとって厄介なマルコマンニ戦争の始まりとなる。ローマとヨーロッパの近隣諸民族との相互関係の歴史における転機がここから始まったとされる。

これら文献からゲルマン人とローマ帝国の密接な関係が判る。物品だけでなく文化も先進国ローマから入ってきたと思われる。衣装、武器、武具などをはじめ、アウグス帝の時代にローマで導入された１週間のそれぞれの日の名称もゲルマン人の商人によりゲルマーニアにもたらされたのである（Rausing :1995:229f）。最古級のルーン碑文はおおよそ人名で構成されているものである。記述の槍の穂や武器には人名が彫られている。武器に製造者の銘を入れたり、所有する武器や武具にサインを入れるのはローマの風習である。問題は影響の元となったローマ帝国と最古級の碑文が発見されている場所である北海地域とに大きな距離があることである。スカンジナビア、特にデンマークの研究の見解のように発祥の地を最古級の碑文が多く出土されているデンマークとそれを中心とする北海沿岸に求めることは不適切であるとすると他に適切な場所はライン河の国境付近になる。国境付近にはローマ帝国と接触を持つローマ化したゲルマン部族がいた。ここからライン河やエルベ河を伝って北海ルートを取り、文化や物品と共にルーン文字の知識が伝わったのである。彼らがルーン文字を案出し発展させた時期は西暦１世紀と思われる。この他の可能性としてローマ帝国に奉仕するゲルマン人傭兵や商人の関与が挙げられる。Moltke が比較したようにルーン文字はギリシャ、エトルリア、古代ラテン、北イタリア文字の古代文字に似ている。古典ラテン文字は紀元前１世紀～西暦１世紀に徐々に廃れてゆき、ラテン文字が標

準化する。上記可能性のあるゲルマン兵士は文盲ではなかったと思われ、彼らが古代の見本にならい、故国に持ち帰った。最古級の碑文が発見された北海沿岸からはローマの補助軍隊は出ていない。こうしてライン河に発祥の起源が求められるのである。古くからローマ帝国に忠義を示していたラインラントのウビイー族のいた地域が最もそれに相応しいとされており、この地域で初世紀ごろに案出されたルーン文字が発展し、ここから北へ知識が伝わったというのである。

ルーンその語義

初期のものは多くの碑文が人名で、所有者、製作者、銘を刻んだ者の名、他者への贈り物であることを示す名、物品その物の名称などである。記録を必要としなかったゲルマン種族において誰が文字というものを必要としたかというと、既に述べてきたようにローマに雇われたエリートのゲルマン兵やそれに雇われた職人の他、エリート階層と思われる。高価な物品にルーン文字を記し、贈り物として使用する。贈与、部族外婚、移動、奉仕などを通じて広域に広がったと推測される。そしてルーン文字の知識はわずかな者達だけの知識であり、その技術は一握りの者達が保持していた。職人が高価な物品に印を入れるのは誇りある行為であり、他者から羨望を集めるため、気軽にはその知識を与えようとはしなかった。こうして初期段階におけるルーン碑文のある物品が少ないことが説明される。それゆえにルーンという語は「秘密、神秘」という意味を保持するという。しかしながら碑文中はルーンはルーン文字を示すのである。

runo faihido	(Einang 石碑。ノルウェイ・オップランド。350～400 年)
runo fahi	(Noleby 石碑。スウェーデン・ヴェステルヨータランド。450 年)
writum **runo**	(Eikeland フィブラ。ノルウェイ・ロガランド。450 年)
runoz waritu	(Järsberg 石碑。スウェーデン・ヴェルムランド。450 年)
wurte **runoz**	(Tjurkö ブラクテアート 1。スウェーデン・ブレーキンイェ。500 年)
warAit **runAz** þAiAz	(Istaby 石碑。スウェーデン・ブレーキンイェ。600～650 年)
hidez**runo** no	(Stentoften 石碑。スウェーデン・ブレーキンイェ。600～650 年)
hAidzruno **ronu**	(Björketorp 石碑。スウェーデン・ブレーキンイェ。600～650 年)

様々な言語のルーンという語を辞書で引いた場合、「神秘、秘密」が表記されている。そしてこの語意は最古級の碑文の時代において文字を使用する者が一部の特殊な特権階級のみが用いていたとしても、生きたルーン文字があった場所にその意味があったかどうかは碑文で判断する限りは確信し難い。Richard Morris(1985)はゲルマン語 rūn-「ルーン」の語源は「溝をつける」もしくは「刻む」とした。Elof Hellquist は Svensk etymologisk ordbok の中で、ルーンは「音を作る」を意味する語根 ru から由来するととした。そして「神秘、秘密」は第二義であるとしている。また、ウルフィラは4世紀にゴート語に聖書を翻訳する時、「神の王国の神秘」(iv. ii)という文章を rūna þiudangardjōs guþs として訳した。このゴート語 rūna の意味は「神秘、秘密」である。

闘争と奉納品

沼や湖への奉納は人の移動と闘争が関係すると思われる。ローマ帝国との国境での帝国とゲルマン部族との衝突とスカンジナビア南部での武器の沼や湖への奉納との間に恐らく関連あがるとされている。マルコマンニの戦いと南部スカンジナビアの最初の闘争の時期が一致し、Vimose の奉納品は同時代の物で、南方からフューン島への攻撃があったのである。同時代のスカンジナビア中で多くの墓にも武器の副葬品があった。西暦 200 年ごろに武器の量産があり、数百規模の兵の武力があったと推測される。Ilkjær によると剣はローマ製で、これはラインラントとスカンジナビアに関係があったことを示すというのである。デンマークのエリート層もラインラントのローマ化したゲルマン部族とつながりがあったと推測し、ユラン半島の Vimose の奉納品は中央ヨーロッパとの繋がりを明示するものであると思われる。

しかし(Brøndsted 1960: 271-3; DRI: 854-7; Jankuhn 1952b: 35-7; Oxenstierna 1957:66-104)は２～３世紀の Vimose の奉納品はダニ族とヘルリ族の闘争に一致するとしている(E. A. Makaev 1965 1996: 37) 。文献によるとヘルリ族はダニ族によってスカンジナビアから追い出され、大陸へ移動した（ヘルリ族については後述）。

西ゲルマン仮説

スカンジナビア南部で発見されている奉納品のいくつかは南方からきたもの、物品そのものはスカンジナビア原産であるものであるが碑文は南方伝来のものとの見解がある。Illerup の西暦 150 ～ 200 年の２つの鉄製の槍の穂には最古級の碑文があり、同じ碑文の wagnijo と記されていた。片方は刻印で、もう一方は型押しであった。また同じ碑文が Vimose の沼からも見つかっている。

wagnijo は現在のフランクフルトの南方の中央ライン地域からもたらされたと思われ、そこにはウァンギオーネス族がいた。そしてこの碑文はその部族に関連すると思われる。また Vimose 櫛の碑文の harja はリュギィー族の一派のハリイー族と関連すると思われる。そして Illerup 沼の楯の握りの碑文の niþijo はウァンギオーネス族の近隣に住んでいたニーデンセス族に結びつくと推測される。これら武器に記された銘はローマの風習に倣って鍛冶職人が入れたものと思われ、それぞれの部族の物というものを明示していると推測される。そして銘は南方からもたらされたと思われる。また、碑文中の ijo と ija に注目し、これを「～の家系」との解釈ができるとし、それぞれの出身部族を示すものであるとの見解もある。また、語尾 -o、-a は主格語尾 *-z を失った語形で、どちらも西ゲルマン語のものとの推測もある(syrett 1994: 146)。ユラン半島、フェーン島、シェラン島の西暦 200 年ごろの碑文の wagnijo、niþijo、harja、swara、hariso、alugod、leþro、lamo、lagþewa という名は西ゲルマン語であるとし、ライン河付近のゲルマン部族にその起源を求めようとしている。

Vimose 櫛　harja

ラテン文字との比較

	Wimmer/ Pedersen	Askeberg	Moltke	Looijenga
	F	F	F	F
	V	V	V	V
	D	D	D	D
	A	A	A	A
	R	R	R	R
	C	C	C	C
	X	X	?X	X
	Q	P	?P	ルーンの異形
	H	H	H	H
	N	N	考案	N
	I	I	I	I
	G	G	考案	G
	Y	Z	考案	＋　の合字
	P	考案	考案	ルーンの異形
	Z	Y	考案	エトルリア、 イタリア文字
、	S	S	S	S
	T	T	T	T
	B	B	B	B
、	E	E	M	E
	M	M	M	M
	L	L	L	L
	考案	考案	考案	の異形
	考案	考案	考案	ルーンの鏡像
	O	O	O	O

並べてみるとラテン文字とルーン文字との形状が似ており、また、時代や地域において問題がないように思われる。しかし E. H. Antonsen はラテン文字説に問題を投げかけている。まずラテン文字説の大きな問題として取り上げられるのは比較の元となるルーン文字の基本形である。ルーン文字の基本形というものは後世の研究者らによる再建形である。基本形というものがわかっていないのにもかかわらずラテン大文字に類似するものを選出していることが問題なのである。sルーンは古いものは　、　とジグザグの数が多い。kルーンは古いものは　の形状である。hルーンも大陸の　の形状を選ばず、スカンジナビアやゴートの　の形状を選んでいる。他、zルーン　、e ルーン　、rルーン　、pルーン　、dルーン□、jルーン　などのバリエーションがある。

また、大きな問題となるのがルーン碑文の書く方向である。ラテン文字は左から右に必ず書かれるのであるが、ルーン文字は左から右、右から左、または交互方向に書かれるという黎耕体の書き方があり、自由に書かれる。一方、地中海の古代の文字も方向が自由であった。そしてルーン文字には語と語の間に空白がなく、ルーン文字に頻繁に見られる合字の使用がラテン文字にはない。またルーン文字には重子音の書き方がないなどが挙げられる。そして同器性の妨害音の前での鼻音の明示がない。これらは古代の地中海の書き物の習慣に一部、もしくはほとんどが合致し、最古級のルーン碑文の書き方に顕著に現れているとしている。

ルーン文字の正書法とそこから推測する PG(ゲルマン基語)の影響

ルーン文字にも正書法がある。ルーン文字を原始的文字と認識されている方々にはなかなか正書法の存在は理解してもらえないのですが、より詳しく分析してみるとそれが浮かび上がってくる。単純につづり間違いと思われていたものも順序だてて説明ができる場合があるのである。

Looijenga が述べるように一部のエリート層とそれに雇われた職人のみが使用し、簡単には伝授しなかった技であるとの見解を支持すると、なおさら書く伝統というものが守られるであろう。

―　正書法の数例　―

・記述のように重子音の表記がない。これは２つの単語間においても適応された。
　例　*hallaz* = halaz

・一般的に同器性の妨害音の前での鼻音の明示がない。これは地中海の文字でもそうである。例　-hudaz = *hundaz*

・北西ゲルマン語の/ē/は-ai とつづる。(E. H. Antonsen 1975: 12-14)

等々である。そして興味深いのは最後のものである。

１）三人称単数過去時制の語尾の PG/-æ/は北西ゲルマン語では/-ē/に歴史言語学上は変化する。「作った」PG（ゲルマン基語）*/tawidæ/は北西ゲルマン語では/tawidē/となる。

２）強勢のない音節の単数与格ａ語幹の語尾 PG/-ai/は北西ゲルマン語では短母音化し/-ē/に歴史言語学上変化する。「軍馬」PG*/hanhai/は北西ゲルマン語では/hanhē/になる。
(E. H. Antonsen 2002: 47-48,114-115)

A）tawide「作った」　(Garbølle 木製箱。デンマーク・シェラン島。AD400 年)
B）hahai「軍馬」　(Möjbro 石碑。スウェーデン・ウップランド。AD300 年)
C）talgidai「彫った」　(Nøvling フィブラ。デンマーク・北ユラン半島。AD200 年)
D）maridai「飾った」　(Vimose フィブラ。デンマーク・フューン島。AD250～300 年)
E）winai「友」　(Årstad 石碑。ノルウェイ・ロガランド。AD300 年)
F）aiwuidai「作った」　(Darum ブラクテアート。デンマーク・ユラン半島。AD450～550 年)
G）faþai「夫、主」　(Charnay フィブラ。フランス・ソーヌエロワール県。AD550～600 年)

C）、D)、F)は歴史言語学上間違いなのである。つまり正確につづった場合、

talgide (PG */taw-i-dæ-d/ > /talgidē/)
maride (PG */mær-i-dæ-d/ > /maridē/)
aiwuide (PG */aiw-i-dæ-d/ > /aiwidē/)

としなければならない。なぜこのようなつづり間違いが発生したかというと、古代の書き方の伝統の存在が挙げられる。書かれた言語は話された言語より保守的である。そのために発音とつづりが一致しないという事柄が生じる。つまり正確に語形の変化を知っていた者は古風なつづりを用い、/-ē/に変化した単数与格ａ 語幹の語尾 PG を古風なつづりである/-ai/とつづっていた。また、三人称単数過去時制の語尾の PG/-æ/の正確な変化を知っていた、もしくは古風なつづりを用いない音に従った者は/-ē/、つまりA)、のようにつづったのである。しかし正確にこの事柄を知らなかった者は/-ē/を全て/-ai/とつづると誤解し、結果的に歴史言語学上間違った正書法を生み出すことになったのである。しかし E. Moltke はブラクテアートにおけるこれらのつづりは単純に文盲の金細工職人による間違いとしている。

そして E. H. Antonsen はこれらのことからルーン文字の知識は PG の時代からあったものとして、より古い時代にその発祥時期を求める。この PG の時代ではギリシャ文字やラテン文字の古典期における標準化が十分に確立していない時期である。

Joseph B. Voyles の Early Germanic Grammar(60: 3.1.4)にこの変化が書かれており、AD 50 年 ～ AD 200 年に割り当てられる。

― 強勢のない/ai,au/の短母音化 ―

まず東ゲルマン語で起こり、これが全ゲルマン語に広がるという２段階がある。

１）東ゲルマン語のみでの変化

ai、au　→　、

強勢のない音節に続く最後の強勢のない音節中。

２）全ゲルマン語

ai、au　→　　、　→　北西ゲルマン語　ē、ō

これは全ての強勢のない /ai、au/ で起こっている。そして開音―緊張音/　、　/は最終的に北西ゲルマン語で、より閉音で緊張音の/ē, ō/になる。
（Joseph B. Voyles は動詞、名詞の区別無く重母音の短母音化として扱っている）

つまり E. H. Antonsen はルーンの書き物の伝統の一部が重母音の短母音化以前にあったものと推測している。

参・ゲルマン語の格変化（研究社・新英語学辞典: 492 GERMANIC LANGUAGES）

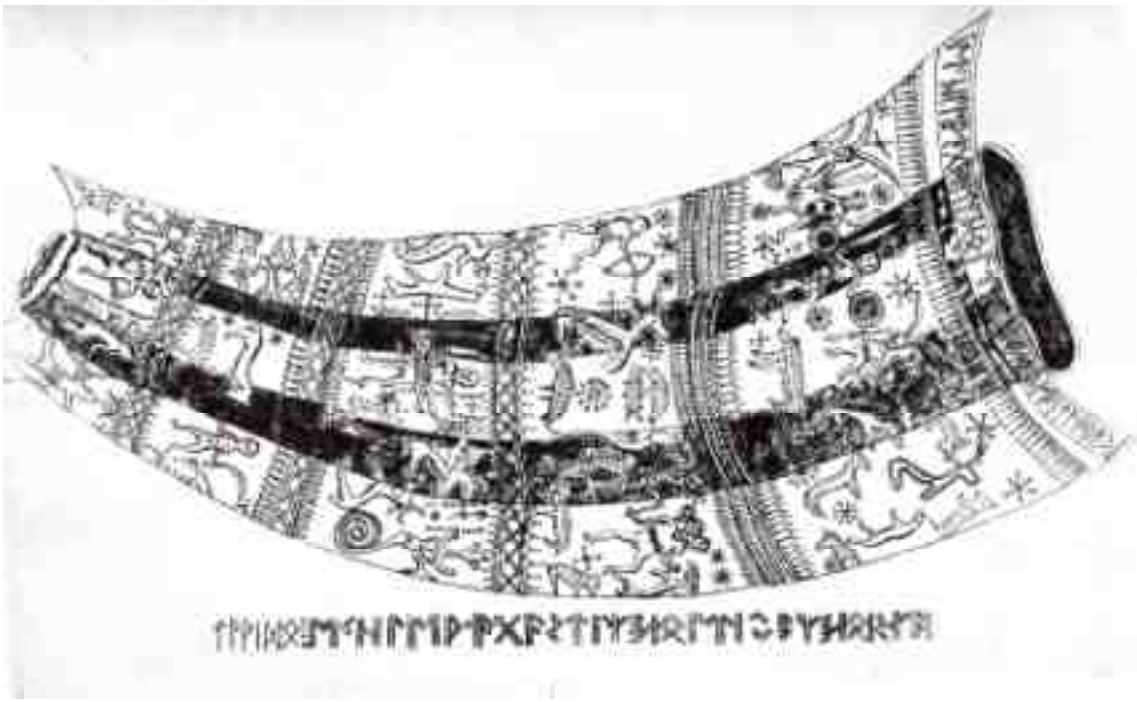
単数	主格	*ðav-a-z
	対格	*ðav-a-m
	属格	*ðav-a-s
	与格	*ðav-ai
複数	主格	*ðav-ôs
	対格	*ðav-a-ns
	属格	*ðav-ôm
	与格	*ðav-umiz

古典的文法

《統語論上の特徴。この分野はまだ十分には研究されていないところが多い。屈折語尾の単純化と共に、人称語尾の代わりに代名詞が発達し、格語尾の変わりに前置詞が発達してきた。さらに、指示代名詞は冠詞的機能を発達させるに至った。これらはヨーロッパ諸言語にみられる現象で、文形成の語順に関連があるように思われる。W. P. Lehmann(1978)によれば、前置詞・代名詞の発達は‘動詞＋目的語’（VO）型の文形成を行う言語の特徴であり、これは屈折語尾などが OV 型の言語の特徴であるのと対照的である。実際、IE は本来 OV 型であったが、ヨーロッパ諸言語はそこから VO 型に転向したと考えられ、ゲルマン諸語もその例外ではなかった。》

【抜粋・（研究社・新英語学辞典: 492-493 GERMANIC LANGUAGES）】

盗難に遭い、恐らく溶解されて現存しない有名なデンマーク・南ユラン半島の AD400 年の Gallehus の金の角杯の碑文は古い語順を示すのである。



Transliteration : ekhlewagastiz : holtijaz : horna : tawido :

Transcription : ek hlewagastiz holtijaz horna tawido

訳　私は Hlewagastiz　Holtagastiz **の息子　角を　作った。**

OV **型で古い語順を示している。**VO **型の例もあるが、圧倒的に最古級の碑文は** OV **型である。**

makija maridai

「**剣　飾った**」(Vimose **剣のこじり。デンマーク・フューン島。**AD250～300 **年**)

runo faihido

「**ルーン文字　書いた**」(Einang **石碑。ノルウェイ・オップランド。**AD300～400 **年**)

runo fahi raginakudo tojeka

「**適切な神から由来すルーン文字　整える**」(Noleby **石碑。スウェーデン・ヴェステルヨータランド。**AD450 **年**)

runoz waritu

「**ルーン文字　書いた**」(Järsberg **石碑。スウェーデン・**Värmland**。**AD450 **年**)

r writu

「**ルーン文字　書いた**」(Sievern **ブラクテアート。ランド・ブレーメン・ドイツ。**AD450～550 **年**)

属格が意味する事柄

最古級の碑文は高価な物品に記すサインであり、製造者の銘、所有者名、他者への贈り物、その物品の名などである。西暦５世紀以降から墓碑が記されるようになる。墓碑のそばに埋葬者がいない場合でも墓碑と判るのは、属格の存在である。属格のある石碑は死者への手向けと推測される。また最後の Kalleby 石碑は属格の後に続く言葉は、墓石の破壊を防ぐための文句であろうと思われる(E. H. Antonsen: 2002 191)。

þrawijan haitinaz was...「Þrawija の（記念碑)。(私は、彼は）命じられた」
(Kalleby 石碑。スウェーデン・ボーフュースレン。AD400 年)
(※ þrawijan は不定形ではなく、*þrawijana の語尾鼻音*/-a/がないもの)
igijon halaz「Ingiō の石」
(Stenstad 石碑。ノルウェイ・テレマーク。AD450 年)
keþan「Keþa の石碑」
(Belland 石碑。ノルウェイ・ヴェストアグデル。AD500 年)
harijan leugaz「Harija の（記念碑)」
(Skåäng 石碑。スウェーデン・セーデルマンランド。AD500 年)
hnabdas hlaiwa「Hnabdaz の墓」
(Bø 石碑。ノルウェイ・ロガランド。AD500 年)
...an waruz「・・・a の囲い地」
(Tomstad 石碑。ノルウェイ・ヴェストアグデル。AD500 年)
wajaradas「Wajarādaz の（記念碑)」
(Saude 石碑。ノルウェイ・テレマーク。AD500 年)

祈願の単語

ルーン文字は神秘文字であり、魔術のための文字として発祥、発展した。これも 20 世紀に置いてきましょう。なんら立証する術はなく、希望的見解にすぎず、曲解され更なる学術的な展開が阻害されてしまうからです。ローマ帝国の文化の模倣を支持するのであれば、これらの高価な物品に碑文を記し、外交、政治的な贈り物として他者に渡す場合、そこに相手の幸福を願う文章が刻まれたとしてもなんら不思議はない。現代に置き換えてみると他者に贈る高価な物品に受益者への幸福を願う文章を刻む。そして受取人はそれをお守りとして肌身離さず持つということがあるかと思います。単純にルーン文字の生きた時代にそれがあったということでの理解の方がいいのではなかろうかと思います。

alu

この語は英語の ale と同じ語で、「エール、麦酒」を意味するというのが一般的である。直接これと結びつけることは出来ないが、歌謡エッダ詩の内のシグルドリーヴァの詩の７節に麦酒のルーネが登場する。この語が記された碑文は石碑上では AD400 ～ AD500 年

の Elgesem 石碑（ノルウェイ・ヴェストフォルド）のみで、他はほとんどがブラクテアート上であり、それ以外は携行できる物品の上である。合成語もあり、alugod(Værløse フィブラ。デンマーク・シェラン島。AD200 年(?))がある。

金製のブラクテアートは移動時代の AD５世紀後半～６世紀初めまでの短期間に量産され、贈り物、護符としてローマのコインやメダルを真似して作られたと思われる。ローマでは金製のメダルは護符として用いられた。ゲルマンにおけるメダルの模倣は４世紀後半に始まり、総数で 900 個あり、製作地以外では 140 個発見されている。最も多いのはドイツで、南はハンガリー、東はロシアにまで分布している(Looijenga: 2003 44)。ブラクテアートには図柄が擦り切れたものもあり、護符として身に着けていたために磨耗したと理解される。

この alu がまじないの語であると判るのはあくまでもこういった状況証拠からである。儀式を行う時にエールが用いられた可能性、エールを飲むことによって引き起こされる身体的な変化などにその理由を求めようとするものもある。またノルウェイ語では埋葬の宴会を gravølet と言い、逐語的には「墓の麦酒」で、これにより儀式とエールが結びつきを指摘するものもある。

laukaz

同様にまじない語と理解されている。西洋葱を意味する。ほとんどがブラクテアート上で、その他は携行できる物品上（Fløksand 掻く道具。AD350 年。ノルウェイ・ホルダランド）にある。

laþu

同。祈祷を意味する。ブラクテアート上にある。

これら alu、laukaz、laþu の銘のあるブラクテアートはデンマークユラン半島、シェラン島、スコーネ、ゴットランドで発見されている。

salu、hagalu

前から捧げ物、霰を意味する。ブラクテアート上にある。

auja

保護、幸運、富を意味する。gibu auja は「幸運（もしくは富）を授ける」を意味する。ブラクテアート上の他は Vimose 鞘のプレート。AD200～300 年。デンマーク･フューン島、Vimose バックル。AD200 年。デンマーク・フューン島の碑文がある。また合成語として laas-auwija(Vimose バックル。AD200 年。デンマーク・フューン島)の西ゲルマン語の碑文がある。

ehwu

雄馬を意味する。ブラクテアート上にある。

ブラクテアート

Br6	Skrydstrup Sønderjylland	laukaz alu
Br7	Galsted Sønderjylland	la
Br8	Skodborg Sønderjylland	auja alawin auja alawin auja alawin j alawid (幸運を、Alawin(全友人、等)、幸運、Alawin、幸運 Alawin、良き収穫期、Alawid)(西ゲルマン語)
Br9	Darum 1 Nørrejylland	frohila laþu (Frōdila(小さな見識者、等)。召還する。)

Br12	Darum 4 Nørrejylland	lïïaþzet lae : t ozrï
Br13	Darum 5 Nørrejylland	niujil alu
Br16	Skonager Nørrejylland	niuwila lþu
Br29	Års Nørrejylland	laukaz

Br42	Fyn 1 Fyn	horaz laþuaadraaaliiu alu (Hōraz(最愛の人、等)。召還する・・・alu)
Br45	Femø Maribo a.	ek fakazf (私、Fākaz、f)
Br49	Højstrup Sjælland	laþu (召還する)
Br55	Lellinge Sjælland	salu salu (捧げもの、捧げもの)

Br63	Börringe Skåne	laukaz tantulu : al (Tantulū(小さな魅惑的な女性、等)。alu(?))
Br67	Skåne 1 Skåne	laþu laukaz・gakaz alu (召還する、西洋葱、Gakaz、alu)
Br75	Tjurkö Blekinge	wurte runoz an walhakurne heldaz kunimudiu (外来の粒(ブラクテアート(黄金(の粒)の外国の使用の意味を内包する)等)の上のルーン文字は作った Kunimunduz(血族の保護者、等)のために Heldaz(戦士、等)を。

最古級の碑文の Illerup 沼の奉納品の実例

Illerup I 楯の握り
swarta「黒きもの」。Looigenga は武器鍛冶屋の名前と推論している。主格語尾-z の欠落したもの。一般的に北ゲルマン語では主格語尾-z はある。そのためこの碑文は西ゲルマン語と思われる。

Illerup II 楯の握り
niþijo tawide「Niþijō が作った」。niþijo 中の-ijo は西ゲルマン語と思われ、ウビィー族の地域の男性名に特に見受けられる。そして Looijenga はこれをニーデンセス族を示すとしている。

Illerup III 楯の握り
laguþewa「海の使用人」主格語尾-z の欠落したもの。

Illerup IV 鉄の槍の穂
wangnijo ウァンギオーネス族と結びつき、西ゲルマン語であろう。

Illerup V 木製の握り
gauþz オージン神の別名ガウト、もしくはスウェーデンのガウト族に結びつける見解がある。

フサルク fuþarkgwhnijpïzstbemlngdo

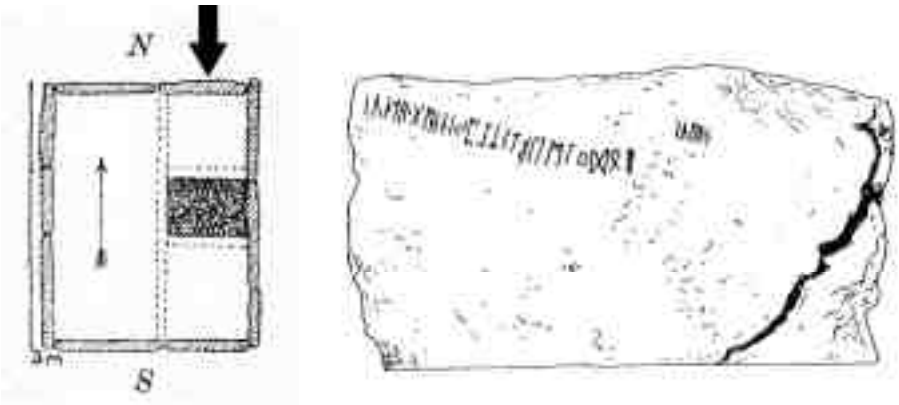
ルーン文字の 24 個は決まった順序があり、前から６つの文字を取ってフサルクと呼ばれる。共通ゲルマンルーン文字では完全なフサルク、もしくは一部が発見されている。この独特の順序というのは全くもって説明がされていない。この順序がどこから由来するかは全く不明なのである。そしてルーン文字の発祥当時からあったかというと、少なくとも 24 文字の順列はなかったと思われる。現在フサルクの順列が発見されているものは５～６世紀頃のゲルマン民族の移住時代のものである。また、議論の的になる ï ルーンは５世紀以降、ing のルーンは３世紀以後以降と後に変更、追加されたものと認識されている。

Kylver 石板	(f)uþarkwhnijpïzstbemlngdo
Grumpan ブラクテアート	fuþarkgw . . . . . hnijïp . . . . tbemlgod
Vadstena ブラクテアート	fuþarkgw:hnijïbzs:tbemlngo(d)
Breza 石柱	fuþarkgwhnijïpzstem(l)
Aquincum フィブラ	fuþarkgw
Beuchte フィブラ	fuþarzj
Charnay フィブラ	fuþarkgwhnijïpzstbem

Charnay フィブラ

Vadstena ブラクテアート

このフサルク自体がまじない語であるとの認識もある。その例に挙げられるのが Kylver 石碑で、フサルクと共に sueus という回文の碑文と共に樹の形状のものが刻まれている。これは墓を取り囲む石版の一つで、目に触れられない部分だったため儀式的な意味合いがあると理解する者もいた。しかし、E. H. Antonsen はこれらのことはなんら立証する術はなく、石碑の再利用の実例を挙げ、語順のお手本などの世俗的な目的で彫られていた石版を墓石に再利用したとの見解を展開している。実際、後のヴァイキング時代のスカンジナビアのルーン石碑、マン島のマンクスクロスなどは教会建材などとして非常に多くのものが再利用されている。



Kylver 石碑（現在はストックホルムの国立歴史博物館）

ルーンの名称

ルーン文字は表意文字である。ルーンのそれぞれが名前を持ち、その最初の音がそのルーンの音である。碑文中においても単独のルーンが語そのものを表すのに用いられている。これも 20 世紀に置いてきて下さい。全く根拠がなく、立証ができない事柄である。表意文字である漢字に慣れ親しんでいるため、ついうっかりと鵜呑みにしてしまうのであるが、今の所解明されていないが個々のルーンにその音から始まる名称があったであろうとの認識がよりよいと思います。後の写本には北欧と英国のルーン文字名称は記されている。し

かし共通ゲルマンの名称というのは後の研究においての再建形であり、当時のものは存在しない。また、ルーンのいくつかは発祥当時からあったとは思われず、名称が確立したのも最古級の碑文の時代かどうかは判断できるものがない。旅行業界においての符丁がある。Denmark の D、England の E といった風にして聞き間違いを防ぐために使われている。正直、ルーンの名称はこの程度のものとの認識の方がよりよいかもしれないと思います。ルーン単体で記されている場合、単語を省略した語頭にあたるルーンが記されている。

saba **r** (Wapno ブラクテアート。ポーランド・Poznan。AD450～550 年)
ek fakaz **f** (Femø ブラクテアート。デンマーク・Femø 島。AD450～550 年)
r writu (Sievern ブラクテアート。ドイツ・ランド＝ブレーメン。AD450～550 年)

r は runō(z)「ルーン文字」、f は faihidō「書いた」の省略形である。名称の*fehu でも*raidō でもないのである。これらは他の碑文の例から容易に推測ができる。

ルーンの名称とフサルクの順序について文献がある。後の写本にはルーンの名称が伴うルーン詩が残されている。アイスランドルーン詩、ノルウェイルーン詩は比較的後世のものだが、アングロサクソンルーン詩は恐らく９世紀頃の作品と思われる。また、Abecedarium Nordmannicum という歌がある。この歌の目的は解明されていないが、９世紀の Harbanus Maurus という写本にある。この起源はスカンジナビア（恐らくデンマーク）のルーンとその名であるが、詩そのものは低地ドイツ語、高地ドイツ語、ユトランド方言の特徴を示している。(The Old English Rune poem : a critical edition; H. Maureen 1981: 181)

(R. Derolez; Runica Manuscripta 1954: 78)

(feu) forman	（富み）は最初、
(ur) after	（オーロックス（野牛））は次ぎ、
(thuris) thritten stabu;	（巨人）は３つめの文字
(os) is themo oboro;	（アース神）はそれに続く、

(rat) endos uuritan; （乗馬）は最後に書く。
(chaon) thanne cliuot. （腫瘍）は次ぎ切り開く。

(hagal) (naut) habet, （霰）が持つのは （欠乏）
(is), (ar), endi (sol), （氷）、 （収穫）、そして （太陽）

(tiu), (brica) endi (man) midi, （チュール神）（が持つ）中央に （樺）と（人）、

(lago) the loehto; 清んだ （水）
(yr) al bihabet. （イチイ）は全てを取り囲む。

あらゆるルーン詩が直接的にフサルクの順序の起源を導くものでもルーン文字名称の根拠となるわけではない。もちろんルーンの名称、フサルクの順序の発祥の年代順序を示すものでもない。しかしこの詩は意味も通り、比較的覚えやすいものと思われる。フサルクの順序が先にあっても、それを覚えるためのこうした数え歌的なものが存在し、フサルクの順列が発見されているものが比較的少ないように感じられるのも、こんな理由があったからかもしれない。しかし最古といわれるアングロサクソンルーン詩ですら、その数世紀前の共通ゲルマンルーン文字名称の面影がない。歌は話し言葉よりはより保守的と思われる。それを考慮するとやはり共通ゲルマンルーン文字にまでその起源がたどれるとは思い難い。そうするとますます共通ゲルマンルーン文字の文字名称というのは imaginative 研究者らによる語源をたどる研究によって構築されたもであると現実的な研究者らによって理解されても致し方ないと思われる。

> ゴットランド島のシュルヴェルにある４世紀の地中墓の側面石に、ルーン・アルファベットを全て刻みつけた意識の根拠ともなっている。死者のみが、強力なルーン文字の恩恵に浴することになっていた。
> 【抜粋・人文書院 ヨハネス・ブレンステッズ ヴァイキング 1988: 245】

E. H. Antonsen が述べるように Kylver 石碑のフサルクは順列のお手本であれば、ブレザの石柱を除き他の物は全て携行できるもので、ちょっとした見本帳の機能を果たし、フサルク自体が魔法語であるという推論は否定できる。

erilaz その謎

一体誰が、ルーン文字を習得し、その知識を広めたかということがいつも議論になる。そしてその時、必ず上がってくるのが erilaz の存在である。erilaz の語が記された碑文は 10 個あり、その内の２つは同じ型のブラクテアート上にある。

＜北西ゲルマン語碑文＞

ek **erilaz** asugisalas	(Kragehul 槍の柄。デンマーク・フューン島。AD300 年)
ek **erilaz** sawilagaz	Lindholm 骨片。スウェーデン・スコーネ。AD300 年)
ek wagigaz **erilaz**	(Rosseland 石碑。ノルウェイ・ホルダランド。AD400～500 年)
ek **erilaz**	(Järsberg 石碑。スウェーデン・ヴェルムランド。AD450 年)
ek **erilaz** wiwilan	(Veblungsnes 崖面。ノルウェイ・ロームスダル AD450 年)
ek **erilaz**	(Bratsberg フィブラ。ノルウェイ・テレマーク。AD500 年)

＜北ゲルマン語碑文＞

ek **erlaz**	(Etelhem フィブラ。スウェーデン・ゴトランド島。AD500 年)
ek **erilaz** hrozaz	(By 石碑。ノルウェイ・ブースケルド。AD500～550 年)
e[k] **erilaz**	(Väsby と Äskatrop ブラクテアート。スウェーデン・スコーネ／ハッランド。AD500～550 年)

民族名、役職名と解釈は様々でこれも結論の出ていないことの一つである。恐らくルーン文字の使用に長けた者を指すであろうとの見解はほぼ一致している。

ヘルリ族

erilaz をヘルリ族と結びつけるものがある。ヘルリ族はギリシャとローマ、ゴートとランゴバルドの歴史家にこの民族が知られていた。古代スカンジナビア、フランク王国、古英語からは知られていない。ヘルリ族はラテン語 eruli、ギリシャ語 ἐρουλοι である。ラテン語の形式素 -ilus は形容詞と限定された名詞のみに適応される。通常は形式素 -ulus である。ルーン碑文の erilaz はローマ人によりラテン語の名詞に借入され、-ila は -ula に置き換えられたと思われる。ギリシャ語はラテン語からの借入と思われる。これらからヘルリ族を示す単語は *erilaz、*erulaz、*erlaz のバリエーションが音韻形態論的に考えられる。そしてゲルマン語では *erilaz、*erlaz のみが残されている。ルーン碑文の erilaz とヘルリ族の名称の直接的な結びつきは初期の段階で失われたと推測される(E. A. Makaev 1965 1996: 39)。

ヨルダネスのゴート人の事績の 23 章によればヘルリ族はデーン人に追われてスカンジナビアから南下し、267 年に黒海付近、286 年にライン河下流に出現した。最も原始的なゲルマン人と言われ、既述のように東西２つのヘルリ族がおり、東ヘルリの方が優勢であった。プロコピウスの「秘史」によれば、512 年にローマ人により大部分はイリリクムに置かれ、残りは北欧に戻った。そして彼らは６世紀中頃から記録には登場しない。もちろん言語学上はヘルリ族の言語は全くわかっていない。そしてプロコピウスはヘルリ族の個人名として Hariso を挙げている。この名称はルーン碑文にも記されている。

hariso　(Himlingøje フィブラ I。デンマーク・シェラン島。AD300～400 年)

ヘルリを部族名ではなく、同じ目的を持った集団名との見解もある。同時期に東西２つのヘルリがいたのは、部族が分断されたのではなく、集団が２つあったと理解する。後のヴァイキング、ヴェーリングはそういった同じ目的を持った武装した集団名で、部族名ではない。ヘルリをヴァイキングやヴェーリングのように理解をすれば、彼らの名が登場する場面がその性質に相応しい。ヘルリのいた民族移動期にはいくつかの激戦がある。ローマの総督アエティウスはグンダハール王の率いるブルグント族を相手にするにあたり、アラン族、フランク族、ヘルリ族の混成部隊を編成し、同時にフン族を煽動し、ブルグントに攻撃をさせた。

ゴート人の事績の 197 章では 451 年の 6 月 20 日に始まったと思われるアエティウスとアッチラ王の戦いがある。アッチラは直属のフン人と共に中央に位置し、両翼に配下の部族を分けた。右翼にはアルダリック率いるゲピート族、ヴァラメール指揮下の東ゴート族が並び、左翼には他の全てのゲルマン諸部族、ルギイ、スキール、ヘルリ、クァディ、テュリンゲン、ブルグント、ライン右岸のフランクが配されたと書かれており、259 章ではヘルリ族は軽装の兵として描写されている。プロコピウスの秘史の中にもゲルマン混成軍の一員としてヘルリ族は姿を現す。

ヘルリを集団とすれば６世紀中頃から記録に登場しないのは消滅したのではなく、単に解散したからだとも取れる。もしルーン文字を使用し、広めたのがゲルマンのエリート層であるとし、ヘルリが部族名ではなくえり抜きの編成部隊とすればヘルリがルーン文字を広めたという仮説も成り立つであろう。

役職としての erilaz

erilaz を役職としての理解は、碑文の中に þewaz「使用人、従者」、gudija「神官」（後の古アイスランド語の goði ゴジ）などの語があり、erilaz を含めこれらを役職名として理解する。そして散文エッダのリーグの歌の 34 節と 36 節である。

モージルは男の子を生み、絹でくるんだ。灌水して、**ヤルル**と名をつけた。
彼の髪はブロンドで頬は白く、眼は小さい蛇のように鋭かった。

＜35 節省略＞

旅人リーグは藪から出てきて、旅人リーグは＜彼に＞**ルーネ**を教えた。自分の名を与え、彼をわが子と呼び、世襲財産を、世襲財産を、古い所有地をとってくれと頼んだ。

【抜粋：エッダ・新潮社・谷口幸男訳】

Svein ól Móðir, silki vafði,
ióso vatni, **Iarl** léto heita;
bleict var hár, biartir vangar,
ötul vóro augo sem yrmlingi.
＜35 節省略＞
【抜粋・EDDA Neckel-Kuhn】

Kom þar ór runni Rígr gangandi,
Rígr gangandi, **rúnar** kendi;
sitt gaf heiti, son kvez eiga;
þann bað hann eignaz óðalvöllo,
óðalvöllo, aldnar bygðir.

あまりにもオージン神とルーン文字の結びつきが強いため、つい見逃してしまう詩句である。erilaz、jarl の語を比較する場合、音韻形態論的な問題がない。割れを起こして*erilaz > iarlaR になる。erilaz は複数形で、単数は*erill になると思われる。これらの類推から erilaz と 古アイスランド語の jarlar を結びつける。しかし v. Friesen は複数形での類推に異を唱え、ヤールという首領階級の語が複数形であることが疑問であるとして否定的な見解を示している (E. A. Makaev 1965 1996: 39)。

専業神官の存在

さてここで中世北欧文学ファンの方々は必ずこう思うでしょう。魔法を使うのは男の恥なので、男が使うルーン文字は魔法のものではない。さすれば、上層階級の者らは威厳を示す物品に名声を記すためにルーン文字を使用したとの話が思い起こされる。祭祀は首領である者が兼任し、男の専業神官なんているはずがないと。しかしヘイムスクリングラのユングリンガ・サガには専業神官の存在がある。ノーアトゥンのニヨルズがスウェーデンを治めている時、神官らが死滅したとある。

Á hans dögum dó flestir **díar** ok váru allir brenndir ok blótaðir síðan.

ニョルズをローマ人のいうゲルマンの女神ネルトゥスと同格とすると、これはゲルマン鉄器時代に当たる。つまり最古級の碑文の時代である。沼や湖の奉納品には製造時に記されたものか判断のつかない碑文がある。もしこれらが奉納時に神々に捧げるために記されたものだとすると、ローマ人の文献にあるような供犠を行う催行者の存在、このような専業神官がいたかもしれない。また「P. V. ブロブ著 甦る古代人 刀水書店」は男性の専業神官の存在の示唆をしている。

「いやいやサガは中世の文学だからスノッリの創作である」と指摘されるでしょう。しかし頭ごなしに否定できない可能性もある。数百年前の伝統が作品に残されていると思われる。例えば、同じユングリンガサガ 11 章からである。

> En er hann snørisk aptr til herbergis, þá gekk hann fram eptir svölunum ok til annarra loptdura ok þar inn, missti þá fótum ok fell í mjaðarkerit ok týndisk þar.

そして彼が再び部屋まで戻ってくるとき、高台を探して、別の高台に通じる扉を開けて、中に入った。そこで彼は足場を失い、蜜酒の樽に落ちて、そこで死んだ。
【抜粋：日本アイスランド学会第 25 回 公開講演 伊藤盡：2005】

ユングリンガサガは9世紀末期から10世紀初期に活躍したスカルド詩人フヴィンのショーゾールヴルのユングリンガタルを典拠としている。そしてユングリンガタルにはこう記されている。

Varþ framgengt þar es Fróþe bió
feigþar orþ es at Fiolne kom,
ok sikling suigþess geira
vágr vindlauss of viþa skylde.

フロージの住まいし処にて、フョルニルを捕まえた死の運命は果たされた。
（首の）曲がれるもの（＝雄牛）の槍（＝角、角杯）の嵐なき波（＝蜜酒）はまさに、かの君を死に至らしめた。
【抜粋：同】

注目は元であるユングリンガタルの詩の中に落ちたとは書かれていないことである。しかしスノッリは正確に蜜酒の樽に落ちて死んだ事を知っていたのである。それが判るのは viþa という語で、これは語源はよろめくであり、ここから落ちるということが関連付けされる。つまりスノッリは正確に記している事がわかるのであるということである。
【参考：同】

ひょっとしたらユングリンガサガに太古の記憶が残されているのかもしれない。もっとも数百年の伝統は残されたかもしれないが、千年の伝統が残されたとは到底考え難いのだが。

そして温暖な豊かな時代の díar の時代につづくのは寒冷期の戦士の時代、テオドリック大王、グンテル王、アッチラ王、ローマの勇将アエティウスらの叙事詩が生まれることになる激動のゲルマン大移動時代が到来するのである。

ゲルマン民族移住時代とルーン碑文とゲルマン叙事詩

ゴート民族

初世紀から数百年に渡ってスカンジナビアからスペインまで広く移動した民族がいる。ゴート族である。ヨルダネスのゴート人の事績は今や現存しないカシオドルスの要約であり、それによると彼らはスカンジナビアから黒海まで移住したことが書かれている。

そしてスカンジナビアとの結びつきは移住後も続けられ、ゴートのルーン碑文の形状の特徴は　hルーンの横棒が1本である等の特徴がスカンジナビアのそれと同じである。そして形状上はゴートのルーン文字とスカンジナビアのルーン文字は同じに分類される。そしてこの結びつきから S. Bugge(Bugge-Olsen 1905-1913: 92-120)や v. Friesen(1904)はルーン文字は3世紀あたりの黒海付近のゴート族に由来し、これらはギリシャの草書体から由来すると仮定したのである。しかしながら既述のように3世紀説は過去の説であって、発祥その時代は否定される。

ゴートの碑文は少ない。

warawnis　「Warawins(気をもむ友人、等)」
　(Næsbjerg フィブラ。デンマーク・南ユラン半島。AD200 年)
awings　「Awings(Awa の子孫)」
　(Vimose 鞘のプレート。デンマーク・フューン島。AD200～300 年)
tilarids　「ゴールを追うもの」

(Kowel 槍の穂。ウクライナ・Volhynia。AD250 年)

gutanio wih-(h)ailag 「ゴートの婦人（もしくは女戦士？）の Sacrosanctum」

(Pietroassa 黄金の環。ルーマニア・ワラキア。AD300～400 年)

marings 「Marings(Mar(h)s（もしくは騎手）の子孫)」

(Szabadbattyán バックル。ハンガリー・Tanem。AD400～425 年)

主格語尾 -s はゴート語の特徴である。

東ゴート

また、ゴート人の事績には、古いゴート人の信仰も書かれている。軍神を崇拝し、供儀を行い、戦の長は生贄の人間の血を撒き散らすことによってその神を崇拝した。戦利品をまずその神に捧げ、敵を樹に吊るして武具を脱がした。黒海に定住すると統治者ごとに分かれた。Balthi の一族が治めるヴィシュゴート（聡明なるゴート）と Amali が治めるオストロゴート（光輝あるゴート）の２つである。やがて東ゴートに英雄が生まれる。Gapt は最初の英雄で、彼は Hulmul を生む。Hulmul は Augis を、Augis は Amal を、Amal は Hisarnis を、Hisarnis は Ostrogotha を、Ostrogotha は Hunuil を、Hunuil は Athal を Athal は Achiulf と Oduulf を。Achiulf は Ansila と Ediulf、Vultuulf と Hermanaric を、Vultuulf は Valaravans を、Valaravans は Vinitharius を、Vinitharius は Vandalarius を。Vandalarius は Thiudimer と Valamir と Vidimer を、Thiudimer は Theodoric を、つまりテオドリック王(AD454?～526 年。東ゴート王 AD493～526 年)である。彼はローマに人質として送られ、ビザンツで幼少を過ごし、ローマ化し、国に戻り、王となった後も東ローマ帝国の力になっていたのである。ゴートの碑文はこの王が登場する前のものである。またゴートは古くキリスト教とかかわっており、４世紀の中頃、西ゴートのウルフィラがコンスタンチノープルでアリウス派に改宗し、ゴート族に布教した。そして東ゴートにも伝えられたのである。

ゲルマン叙事詩

375 年、中央アジアのフン族がヴォルヴァ河を渡り、サルマタイ系のアラン族に襲い掛かった。そしてこれが東西のゴート王国に波及し、民族大移動を生むのである。東ゴートは一部は難を逃れたが、多くはフン軍に取り込まれた。フン軍はさらに西ゴートにも襲いかかり、西ゴートはローマの許しを得てローマ帝国内に入った。さらにフン族は西方に進軍し、西暦 420 年ごろにはドナウ河中流地域に到達した。フン軍が西方に進出し、ローマやビザンツを悩ましていた時、同時にゲルマン民族の移動も帝国にとって脅威になっていた。

そしてグンダハール王を頭とするブルグンド族は西暦 435 年にローマとの協定を破り、属州の第一ベルギカに進軍した。ローマのアエティウス(西暦 390 年頃～454 年)はフン族と協定を結んでいた。アエティウスはローマ人だが、人質として西ゴートのアラリック王のもとにおくられた後、彼はフン族の宮廷におくられた。そこで彼はアッチラと親密になったと思われる。彼はブルグンド族を相手にするにあたり、ゲルマン民族の混成部隊を編成

し、同時にフン族にブルグントに攻撃をさせた。西暦 436 年グンダハール王はフンとの激戦で２万の手勢と共に倒れた。しかし西暦 448 年以降はアッチラ(?～AD453 年)の野心が増大したので、彼はフン族の方に矛先を転ざるをえなかった。しかしローマの勇将によってはアッチラは殺されることはなかった。ヨルダネスのゴート人の事績の 254 章にアッチラの死が描かれている。西暦 453 年、アッチラは絶世の美女のイルディコという少女を妻にした。アッチラは結婚式のその夜、就寝中に鼻と喉から出血して死んだ。翌朝、従者が異変に気付き、ドアを打ち破って寝室に入ると、外傷もなく大量の出血で死んだアッチラが横たわり、その横でヴェールで顔を覆ったイルディコが静かに泣いていたというのである。これらの出来事をモチーフとしてニーベルンゲン伝説が出来上がったと思われる。

ニーベルング伝説は西暦５～６世紀のライン河畔のフランケンの領土を発祥の地として歌謡の形式で生じ、その後もドイツ各地へ伝承されていった。この伝承は時代によって第一次伝承と第二次伝承に分けられる。第一次伝承は北欧に伝えられ、「歌謡エッダ」、「散文エッダ」、「ヴォルスンガ・サガ」に伝承される。第二伝承は、その後、ハンザ商人を介してホーコン王 IV 世の被護の元、「ティードレクス・サガ」としてノルウェイに輸入された。これらの他に、比較的新しいフェロー諸島の三個の舞譚詩「クレモルトの復讐」などがある。

イルディコはクリエムヒルトに、ブルグントのグンダハール王はグンテルにあたる。また、フーゴー・クーンによるとブルンヒルトは西ゴートのアタナギルト王の娘のブルンヒルトにあたるという。そしてホイスラーによれば「ニーベルンゲンの歌」の後編のクリエムヒルトの再婚は５世紀のフランケンのブルグント歌謡がその要素となっているというのである（参考：ジークフリード伝説 講談社学術文庫 石川栄作　2004）。

古英語詩の Wīdsīþ にはゴート族とフン族の戦が 109 節～124 節に渡って描かれている。

109　ðonan ic ealne geondhwearf　eþel Gotena,
110　sohte ic a gesiþa　þa selestan;
111　þæt wæs innweorud　Earmanrices.
112　Heðcan sohte ic ond Beadecan　ond Herelingas,
113　Emercan sohte ic ond Fridlan　ond Eastgotan,
114　frodne ond godne　fæder Unwenes.
115　Seccan sohte ic ond Beccan,　Seafolan ond þeodric,
116　Heaþoric ond Sifecan,　Hliþe ond Incgenþeow.
117　Eadwine sohte ic ond Elsan,　ægelmund ond Hungar,
118　ond þa wloncan gedryht　Wiþmyrginga.
119　Wulfhere sohte ic ond Wyrmhere;　ful oft þær wig ne alæg,
120　þonne Hræda here　heardum sweordum
121　ymb Wistlawudu　wergan sceoldon
122　ealdne eþelstol　ætlan leodum.

123 Rædhere sohte ic ond Rondhere, Rumstan ond Gislhere,
124 Wiþergield ond Freoþeric, Wudgan ond Haman;

109 そこから私はゴート人の全ての国中をさまよった。
110 私はいつも最良の同志を探した。
111 彼らは Eormanric の家臣だった。
112 Heðca、私は求めた、そして Beadeca そして Herelings(Harlungs)、
113 私は求めた Emercan と Fridla、そして Eastgota、
114 Unwen の賢明でよき父。
115 私は求めた、Secca と Becca、Seafola、そしてテオドリック、
116 Heaþoric と Sifeca、Hliþe と Incgenþeow。
117 私は求めた、Eadwine と Elsa、Ægelmund、そして Hungar、
118 そして Wiþ-Myrgings の誇り高き一行。
119 私は求めた、Wulfhere と Wyrmhere。滅多と戦は静まらない、
120 頑丈な剣を手にした Hrædas(Hræd-Goths)の軍勢は
121 彼らの古のすまい、Wistla(Vistula)の森のそばで守らねば
122 ならなかった時、Ætil（フン族）の人々から。
124 私は求めた、Rædhere と Rondhere、そして Gislhere。
125 Wiþergield と Freoþeric、Wudga と Hama。
（訳は現代英語訳から）

112 節～114 節では東ゴートの英雄と王の名が連なり、115 節では 13 世紀の中高ドイツ語の叙事詩 Wolfdietrich にも見られるフランク族の英雄の名が挙がっている。117～118 節ではランゴバルド族の英雄が挙げられており、それに続いて 123 節の２人の英雄は 13 世紀の中高ドイツ語詩 Biterolf にも現れ、同じく２人のブルガリアの英雄も登場し、124 節には２人の Heathobardish の勝者と２人のゴートの英雄が現れている。ここではテオドリック大王は Heaþoric として、アエティウスであるアンガンティールは Incgenþeow として登場する(Omeljan Pritsak 1981: 195-197)。

東ゴートのテオドリック大王もこれらの英雄譚に登場する。ティードレクス・サガをはじめ、ニーベルングの歌にも登場し、ヘルヴォルとヘイズレク王のサガにも登場する。このサガは発祥は古く 900 年頃と思われる。３つの写本に残されており、14 世紀前半のホィクルの書(Hauksbók)の H 写本、15 世紀のコペンハーゲン王立図書館の R 写本、17 世紀の紙写本のウプサラの U 写本である。

テオドリック大王はヘイズレク(Heiðrekr)として、そしてローマの総督アエティウスはアンガンティール(Angantýr)として、フランク族の Chlodio はフレズル(Hlöðr)として登場する。古ノルド語で hlöðr は破壊者を意味し、heið-rekr は荒野の王を、Angan Týr は「喜びのチュール神」を意味し、後述のヴァルキューレのヘルヴォル her-vör は her-r 軍勢＋

varr(*warjaR)の女性形で保護者を意味し、ヴァルキューレの性質を示すのである。

しかし R. Much によるとアンガンティールとそのヴァルキューレの妹のヘルヴォルはランゴバルド王朝と結びつけれられ、古英語詩の Wīdsīþ の言及するアゲルムンドゥス王(AD360～400 年)とブルガール（フン族）と戦ったその娘とみなされる。その戦で王は殺害され、娘は捕虜として連れ去られたのである。

ヘルヴォルとヘイズレクのサガには一度抜刀すると人の血を吸わなければ収まらない妖剣 Tyrfingr が登場する。U 写本と H 写本ではオージンの孫の Svafrlami が最初の持ち主で、ドヴァリンとドゥリンの２名のドワーフから剣を与えられた。そしてヘイズレクの母であるヘルヴォルが墓に眠る父を起こして手に入れ、後にヘイズレクが手にすることになり、話を盛り上げるアイテムとなっている。また、サガ中の歌では地名として登場する。一般的に研究者は Tyrfingr は Tervingi に相当するとみなし、これは西ゴートを示すのである。同様に Grýtingar は Greutungi で、これは東ゴートを示す。これら２つの名称はヨルダネスによって伝えられている。Tyrfingr は現スペインである西ゴート王国と結びつき、名剣はそこで作られたと信じられていた。古く紀元前１世紀に Faliscus Grattius の Cynegetica でトレドで製作された優れた刃の言及があり、数世紀に渡って首都トレドは剣の重要な生産地であった。そのため、この名が妖剣に与えられたと思われる。

このヘイズレクの統治する Reið-Gotaland は黒海付近の東ゴートではない。H 写本でホィクルは Reiðgotaland はユトランドであると言及している(þat heitir nú Jútland)。この H 写本の Reiðgotar は８世紀後期から、まずアングロサクソンの文献から見受けられる。８世紀後期のベーオウルフには Hreð-menn として言及され、アルフレッド大王によって９世紀後期に訳された Anglo-Saxon Boethius の“ De consolatione philosophiae ”には Rœdgot、Rœdgota として現れている(Omeljan Pritsak 1981: 213)。

また同様にこの地名は石碑にも残されている。共通ゲルマンルーン文字ではなく、スカンジナビアルーン文字になるのだが、800 年頃にこれらの伝説が刻まれている。

Reð ÞioðrikR	勇敢なテオドリック、
hinn þurmoði,	海の戦士らの王は
stilliR flutna,	統治したのは
strandu HraiðmaraR.	レイドの海の岸。
SitiR nu garuR	さて彼は武装して座るのは
a guta sinum,	ゴートの馬の背、
skialdi umb fatlaðR,	盾を結ぶ、
skati Mœringa.	メリング族の王侯

碑文中の一部抜粋。（訳は現代英語訳から。transcription は S.V.Jensen のもの）

このメリング族という語はテオドリック王家の言及である。Looijenga(2003: 175)は東ゲルマン語碑文の Szabadbattyán の５世紀前半の銀のバックルの碑文 marings を「メリング家」と解釈している。

民族移動の一次終結と第二波

西暦 487 年、東ゴートの王テオドリックは東ローマのゼノン帝の命により西暦 476 年に西ローマ帝国を滅ぼした傭兵隊長オドアケルからイタリアを奪回するために西方に派遣された。テオドリックはオドアケル軍を 489 年に打ち破った後、オドアケルを 493 年に饗宴の最中に謀殺し、東ゴート王国が建国されるのである。そしてこの頃が民族移動が収まった頃である。北ガリアにはフランク、ライン・ドナウ上流にアラマン、ローヌ河谷にブルグンド、南フランスからスペインにかけては西ゴート、スペインの西北隅にスエビ、ブリタニアにはアングロサクソン、アフリカにはヴァンダルがそれぞれ部族王国をたてていた。

そしてランゴバルド族による南下によって再び民族移動が引き起こされた。彼らの南下の障害となるゴート系のゲピード族を打ち倒した。この時、ランゴバルド王アルボインはゲピード王クーニムントの娘を妻としていた。アルボインは妻に倒したクームニントの頭蓋骨で酒杯をつくり、無理やりそれで王妃に酒を飲ませた。後に王は王妃の復讐に遭い倒れるのである。アルボインは西暦 568 年にイタリアにランゴバルド王国を建国する。

ガリアにいたフランク族はいくつかの部族に分かれていたのだが、サリー・フランク族のメロヴェッヒの孫のクローヴィス(西暦 482～511 年)によって統一され、メロヴィング王朝の基礎をかためた。その後、彼はアッティラを撃退したローマの総督アエティウスの息子のシアグリウスを破ったのを手始めに、アラマン族、ブルグンド族、西ゴート族、チューリンゲン族を連覇して統一を成し遂げた。この成功の一つにはそれまで異教徒だったクローヴィスがカトリックに改宗したためだったと言われている。司教グレゴリウスによるとアラマン族との戦いで負けそうになった時、キリストに祈った。その後、大勝利を収めたというのである。クローヴィスの改宗は最も一般的なゲルマン部族の改宗方法が取られたのである。

> グレゴリウスが語るところによると、ランス司教レミギウスにカトリックへの改宗を勧められたクローヴィスは次ぎのように答えたという。「ひとつ障害がある。私の指揮下にある者たちは、彼らの神々を見捨てることに同意しないだろう。私は行って、あなたが私に提案したことを、彼らに提案しよう。」その結果、人々は新たな神を崇拝することを決め、クローヴィスとその２人の

姉妹とともに、彼の軍 3000 人が洗礼を受けた。

これはゲルマン人の改宗において、最も一般的なパターンである。宣教師が王に近づき、もし彼が改宗するなら、その支配下にいる人々も従う。ただし、王といえども、自分の一存のみで改宗を決めることはできず、その前に（特に有力な支持者たちの）同意を求める場合が多い。

【抜粋：論叢第 131 巻第４巻 平成 16 年(2004 年)４月号
異教からキリスト教へ 阪西紀子 2004: 306】

政治的な目論見もあり、首領をはじめその配下の者らが一斉に改宗した場合、より迅速にキリスト教が浸透したと思われる。キリスト教やラテン文字の到来で環境が変じてゆき、大掛かりな副葬品の禁止、沼や湖への奉納の禁止など生きたルーン文字が後世に残される状況を少なくさせたと思われる。

またキリスト教の到来を示す碑文がある。Oberflacht、Kirchheim Teck I がそれであり、おそらく Osthofen、Nordenforf I もそれらの碑文に数えられる。

gba:dulþafd「贈物―祭事―～の後に」
(Oberflacht キリスト教の祭具。ドイツ・Baden-Württemberg。６世紀)
badagihialali dmiu「(我が)歓声(そして)救済(であるのは)主」
(Kirchheim Teck I フィブラ。ドイツ・Baden-Württemberg。６世紀中葉)
go furadi di le+「汝、悪魔もしくは Teofilus（人名）前の神」
(Osthofen 円形ブローチ。ドイツ・ラインヘッセン。７世紀後期)
logaþore wodan wiguþonar?? awa (l)eubwini??
「陰謀、ヴォーダン、Wīguþonar。」
(Nordendorf I フィブラ。ドイツ・ババリア。６世紀中葉)

R. W. V. Elliott は最後の Nordendorf I フィブラの碑文を logaþore は古ノルド語の Lóþurr、Lodur とし、歌謡エッダの巫女の予言の 17 節の三神の一人のローズルと結びつけている。２つめの wodan はオージンで、３つ目の wiguþonar は þonar を Donar つまり古ノルド語の þórr で、頭の部分を「聖なる」もしくは「神聖な」とし、聖なるソール神と解釈している。

大陸のルーン碑文

ほとんどの中央ドイツ、南部ドイツで大量のルーン文字はこれらの時代、６世紀以降からのものである。埋葬品が多く、これは６～７世紀の埋葬の風習が大きく変わったことによるものと思われる。５世紀後半に土葬の風習が始まったと思われ、これはメロビング家が中央ドイツ、南ドイツのゲルマン民族を掌握した頃の時代である。それゆえ南部、中部ドイツには古くからルーン文字の刻んだものを副葬品として捧げたが、積み上げられた薪きの炎で故人と共に灰になって後世に伝えられていないだけだというかもしれないが、湖

や沼の奉納品の最古級の碑文が全く発見されていないことには疑問が残る。

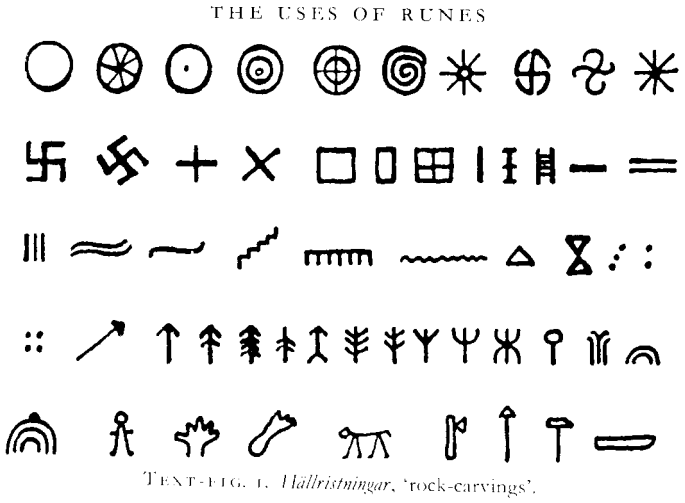
王族級の富裕層の埋葬塚では異教の風習の豪奢な副葬品の習慣は終わっていたのだが、ささやかな副葬品の習慣は残り、そこにルーン文字が残された。キリスト教の祭具にすらルーン碑文が残されている。現状の発見状況では、これらはフランク王国の中心地ではなく辺境地でわずか２世紀の間、使用されたことになる。そしてこれは副葬品の習慣が無くなったことに起因するというのである。やがてラテン文字が圧倒し消え去るのである。

Looijenga(2003: 36, 112)はフランク帝国の中心地では使われず、辺境地のみで使用されたことは驚くことではなく、単に中心地で発見されていないだけだとし、中心地でもその知識は古くからあったと推測している。同時に、ドイツの南部、中部で西暦 500 年以前の碑文の欠乏についても、知識は数世紀前からあったのだが、単に発見されていないだけと推論をしている(2003: 48)。新しいルーン碑文は近年でもたびたび発見されているので言い切ることはできないが、現状の発見の状況からしても、今後最古級の碑文がこれらの地域から出てくる可能性が高いとも思えない。確かに民族移動期で部族が数世紀に渡り同じ地に定着はしていないので、それらの地域に最古級の碑文はなくとも知識は古くからその部族にあったとの推論はたつかもしれないのだが、にわかには受け入れがたく、現状の発見されているルーン碑文からの状況証拠からでは、スカンジナビア、特にデンマークの研究者の見解のようにデンマークを中心としたバルト海の南西海岸に囲まれた地域にルーン文字の発祥が求められる説の方がより自然なものであろうとは感じられる。

●最古級ルーン碑文
×最古の碑文
■６世紀以後のルーン碑文

絵文字とルーン文字

R. W. V. Elliot はルーン文字の発祥と古代からある青銅器時代と鉄器時代にあった岩絵(hällristningar スウェーデン語)などの未発達の書き物とルーン文字を結び付けている。これらは印欧語族の太陽信仰と結びついており、まんじ、回転する円などのモチーフが使われ、これらのモチーフを繰り返す意匠の左右均斉はローマの古典芸術とは異なる。



(R. V. W. Elliott Runes an Intoduction 1989: 85)

これらの伝統が続き、それらを使用する感性がついにはフサルクに到達したというのである。これら記号は上記のようにまとめられてしまうとなるほどその通りのような感じを受けるのだが、実際は岩絵は農耕や戦闘や生活の場面を描写しているのであって、場面の一部を抜き出され、租ルーン文字、ルーン文字を表意文字とする根拠として挙げられてもデータの抽出方法に疑問を感じ、そもそもルーン文字の発祥と青銅器時代とは 1000 年も隔てられており、その伝統がどこまで伝わったか疑問である。音を示す記号、つまり文字を持たない文化において場面の一部の印に音素を与えるという発想はなかなか生まれないのではないだろうかとも感じ、やはり「文字を持つ文明」との接触によって文字はもたらされるものであろうかと思われる。

Looijenga(2003: 81)は帝政時代のはじまりからライン河はローマ帝国との国境で、ここでローマ帝国の文明とゲルマン人との接触がされ、ゲルマン人はイタリックアルファベットをゲルマン語に適した書き物として発展させたとしている。そして武器などに所有を示すサイン、製造者を示すサインとしてローマの使用法を模倣したというのである。ここで根本的な疑問が湧いてくる。文盲のゲルマン人がラテン文字が音を示す記号であり、言葉を留めておく手段であると理解するのにどれ程の時間と労力が要されるだろうか。一朝一夕には取得できないはずである。それほどまで努力して得たものをなぜわざわざ変更して独特のルーン文字として発案、発展させなければならないのか理解に苦しむのである。ラテン文字を利用すればいいのである。ない音素だけを考案すればいいのである。もちろん

言葉を記録してそれを後世に残す必要があればの話だが。

ローマ帝国内でそれらの教育を受けた年金も受給できるゲルマン退役兵はローマ化したエリートで、そんなエリートが身につけた高度な技術を自国に戻った時に他の者らにひけらかすことなく、全く異なる記号を作り出す必要性があるのかとも感じる。

ゲルマン人が独特のゲルマン的アルファベットを考案した理由について Fell はずっと後の中世英語の碑文と写本の実例に多くのその類似性が見出せるというのである。ルーン文字はローマ文字よりもゲルマン人のことばを示すのによりよい手段であると説明している(1994: 130f)。古英語期のアルファベットのことを指していると思われるのだが、アイリッシュ・ラテン・アルファベットと呼ばれるこの文字はラテンアルファベットをアングロサクソンの言語に適応させる時に発生したある程度の不備を補うものとして、いくつかの独自の文字を含めて完成させた事を指しているのである。しかしルーン文字のフサルクとラテン文字のアルファベットの順列は著しく異なる。

ルーン文字はゲルマン語を記すための文字である。ゲルマン語はラテン文字で記すには不向きであるのでルーン文字を発案した。この考え方もいかがなものかと思う。再建されたゲルマン基語の母音は８つで、ルーン文字の母音は単長合わせて 10 個プラス恐らく母音であろうとされる　ルーンを足して 11 個になるのである。母音自体の数が一致していない。子音についても全ての音が徹底されているというわけでもない。これも議論の的になるルーンだが、これはŋと字訳されるのだが、*/ŋ/の音素は古いゲルマン語ではないのである。このよりよい解釈は軟口蓋鼻音ではなく鼻音+気息休止の組み合わせである。このルーン文字は後のスカンジナビアルーン文字では n、g などの個々のルーンがその役を担い、消滅するのである。

要は音をどう理解し、それをどの記号で表現するかの感性の問題ではなかろうかと思う。現に中世以後にヨーロッパ各国はラテン文字でそれぞれの言語を書きとめているのである。日本語が漢字、カタカナ、ひらがなだけでしか記せない言語なのであろうか。

ローマ帝国と密接に関係を持った商人、傭兵にとってはラテン文字を使用する方が利便性が図られるはずである。商人やエリートの退役兵はラテン文字を習得し、その知識を持ってルーン文字をわざわざ発案する必要性があったのか。もしあったとすればそれは何か。もっとも彼らは両国の言語に長け、ラテン語を話す時はラテン文字を書き、ゲルマン諸語を話す時はルーン文字を用いたのかもしれないのだが、全く立証のできない事である。

発祥時期は一般的な見解でもあり、現状の考古学的、言語学的な証拠から西暦１世紀ごろであろう。マトリクスは古代のラテン、エトルリア、ギリシャ文字のどれかか、もしくはそれらいくつかの混合と思われるが、ルーン文字の案出のその理由は単にローマ帝国の高度な文明の模倣、高度な文明への憧れというものでは片付かない。もちろん日頃の出来事を記録するための道具、伝言の道具としてでもない。だがこれはルーン文字が魔法のために案出されたということを指すのではない。ゲルマン民族にあった文化、口承伝承、そこになにかルーン文字の発祥の理由があるかもしれない。ラテン文字は碑文にも用いる記憶を留めておく記録文字である。ルーン文字は碑文を記す文字であり、ゲルマン民族は古の記憶は歌謡に託したのである。

あとがき

2年ぶりのルーン文字の本です。正直、共通ゲルマンルーン文字を取り上げるのは5回目ぐらいとなるので、前のよりは上のものに仕上げようと心がけました。あり難いことに毎作手に取って下さる方がおられるので、その方々に「え、このネタ前見た」と思われては申し訳ないので、以前使ったネタは必要がなければ意識的に省いています。そのため、相当に偏った内容にはなっていると思いますが、そんな意図があると了承してもらえれば幸いです。以前の原稿に書いた情報についてはサイトに載せていますし今後も追記していきますので、この本だけでは不十分な基本的な事柄をそちらで見てもらえれば幸いです。また何かありましたら気軽に掲示板にでも書き込んでもらえれば幸いです。

今回の意図は「できるだけ新しい学説を使用しよう」と「とりあえずつっこんでみよう」です。ルーン文字の本を読んでいたら、たまにどうしても理解不能な文章が出てきます。「木目に混ざって～」や「1世紀遡る」などが最たるもので、それをどんどん調べていると、大抵、S. Bugge、v. Friesen、L. Wimmer に辿り着きます。まるで全てのサラブレッドが3頭の馬に遡るかのようであったりする。そんなことで「昔、大家が言ったから」というのは根拠がないものについては、恐れ多くも「根拠なし」と言ってみました。

今回2つの学者の本を主に使いました。Tineke Looijenga は解析が細かく、データの集め方も丁寧で有り難い学者です。Elmer H. Antonsen はルーン文字を歴史言語学に徹底しており、私自身がルーン文字は下手に文献学や歴史とリンクさせずに歴史言語学で通すのがいいと思っているので、なによりも勉強になります。ただ、両名とも大陸の学者なのでどーしても、南方にルーン文字の起源を求め、なるべく重要性を北からずるずると下げようとするのが見え隠れしたりするのはほほえましいですが。

馬については世間話程度で書いているので自分でも楽しく、筆も進んだのですが、ルーン文字については非常にキツイ状態でした。読み込んだのにもかかわらず、パソコンに向かった途端に、自分のノートに自信がなくなり何度も本を広げ読み直すという作業がひたすら続きました。古代馬術、ヴァイキングの馬術についてはまだまだ調べ方が不十分なので今後も続けていくつもりです。まぁ、もっともそのためには北欧諸語の習得が不可欠なのかもしれないので、不可能かもしれませんが。

また今回は一般の書物ではない紀要論文を使用しています。阪西先生に酒の席でドサクサにまぎれて論文をおねだするという失礼をしたのにもかかわらず、先生は快く了承下さりすぐに送って下さいました。本当に有難うございました。え？伊藤先生？あー出世払いで。うそうそ。伊藤先生には文献や文献の解釈の仕方などで色々とお世話になりました。あらためてここで御礼申し上げます。

次回はいつになるんでしょうかねぇ。マン島の碑文も資料は集まったので、原稿を書き直したいとは思っていますが。

気長にお待ち願えれば幸いです。

2005年7月吉日